

柿本人麻呂の漢文受容と独自の漢字表現をめぐって

——『万葉集』第 2382 番歌をきっかけに

神戸夙川学院大学中国語非常勤講師、劉争

【目次】

1. はじめに
 2. 第 2382 番歌及びその関連歌
 3. 各句表現についての考察
 4. 「満行」と「正一人」から見る柿本人麻呂の漢文受容とその表現の独自性
 5. 結論
-

1. はじめに

柿本朝臣人麻呂は万葉歌人の一人として、代々の歌人たちに歌聖として崇拝され、日本の歌道に強い影響を及ぼした人物と言える。『万葉事典』¹に評価されている通り、万葉集における作歌や人麻呂歌集の採録状況からも万葉歌人が、人麻呂の歌を尊重し、人麻呂歌集の分類様式を万葉集編纂の範とした事実を知ることができるし、平安以降にあっても、古今集仮名序で紀貫之が人麻呂を「歌のひじり」として崇拝と称することから人麻呂の重要性が明らかである。

また柿本人麻呂の修辞について『万葉事典』²ではこう評価する。「類聚的に編纂されていた古体歌においては、抒情の形として短歌形式が確立し、口誦の呪的称詞に由来する枕詞や、口誦の発想様式であった序詞が、記載の修辞としてとらえ直され、一首の抒情を積極的に担うようになる。また、中国文学の知識にもとづき、呪術的な自然観を脱した新しい発想による歌を作り、新しい歌の形式として旋頭歌を試みた。」

万葉集における中国文学や仏教思想の受容などについてすでに多くの研究³に指摘されたのである。柿本人麻呂も七夕の歌を始め、中国の文化の影響を受けたとされている。彼の作風について「その動機は多くは儀式的で、宗教的・政治的・社交的なものであったが、その表現においては、一方では在来の口誦的な祭式詞章・民間歌謡の伝統やエネルギーを

継承しつつ、他方では『文選』をはじめとする中国文学が外来文化を柔軟に消化吸収して、その場の享受者を魅了するに足る、清新で活力ある文芸としての抒情詩を確立した」。⁴

しかし、柿本人麻呂の独自性は決してすべてが中国文学、中国文化からの受容であるとして理解してはならない。あくまでにヒントを与えたのに過ぎないと考えてよいであろう。

柿本人麻呂は独特な修飾語を駆使することで美しい風景を立体的に構築することも成功していると考ええる。「人麻呂の短歌は短歌形式のもつ内在律や表現力を多様に追及している」⁵。例えば有名な夕波千鳥、月船星林の歌、

266 番歌 淡海乃海 夕浪千鳥 汝鳴者 情毛思努尔 古所念（あふみのうみ ゆふなみちどり ながなけば こころもしのに いにしへおもほゆ）

1068 番歌 天海丹 雲之波立 月船 星之林丹 榜隠所見（あめのうみに くものなみたち つきのふね ほしのはやしに こぎかくるみゆ）

うち、千鳥の例は躍動感があって、鳥の動きを想像することから、波となる水の立体的な構図が作り上げたのである。また、星林の例は星を森のように例えて、船が森の中に入っていけるような空間を作り上げたのである。266 番歌について、『日本古典文学大辞典』は「初句と第二句とを体言でおさえ、名詞を重ねて情景を構築する漢語的造語法をとりつつ、第三句でも休止し、七七の下句に懷古の感情を波打たせる。」⁶とも指摘している。このような表現と表現の発想は柿本人麻呂の独自のものと見るべきである。

ほかにも多くの先行研究⁷では柿本人麻呂の「独自性」についての研究は多く行われてきたが、本論は今までの研究ではほとんど注目されなかった柿本人麻呂の独自性が凝縮している一首の小さな作品について考察を試みる。

彼の作品である、略体歌の第十一巻の第 2382 番歌は誠に平凡な一首に見えるこの歌から見られる柿本人麻呂の独自性を見出す考察を本論とする。日本上代における中国文化の受容に関する一例として漢字の選択とその独自性の関係を探るべく、『万葉集』第 2382 番歌を一例として取り上げて論考する。

2. 第 2382 番歌およびその関連歌

卷十一．第二三八二番歌 打日刺 宮道人 雖満行 吾念公 正一人

（うちひさす みやぢをひとは みちゆけど あがおもふきみは ただひとりのみ）

歌の大意は「（うちひさす）都大路を人は 溢れて通るが ここから愛するお方は ただ一人きり」⁸と理解できる。

この歌は第十一巻正述心緒部に位置する略体歌である。この歌は第三句までは序の形を取っていて、「わがおもふきみはただひとりのみ」というのは本意であろう。⁹

『万葉集古義』¹⁰（鹿持雅澄）では、この歌を第四巻 485 番歌、反歌 486 番歌、第十三巻 3248 番歌、反歌 3249 番歌と「思い合わすべし」と把握している。

では、関連各歌も合わせて見てみよう。

まず、第 485 番歌について、万葉集では岡本天皇の御製一首併せて短歌としているが、先

行研究では「君」の表現は作者は皇極天皇ではないかと推測する。

485 番歌：神代從。生繼來者。人多。国爾波満而。味村乃。去來者行跡。吾恋流。君爾之不有者。昼波。日乃久流留麻弓。夜者。夜之明流寸食。念乍。寐宿難爾登。阿可思通良久茂。長此夜乎。

(かみよより あれつぎくれば ひとさにはに くににはみちて あぢむらの かよひはゆけど あがこふる きみにしあらねば ひるは ひのくるるまで よるは よのあくるきはみ おもいつつ おもねかてにと あかしつらくも ながきこのよを)

大意は人がいっぱい国土に満ち溢れてあじ鴨のように群がって往還してはいるが、わたしの嘆き恋い慕っているあの方ではないので、昼は暮れるまで、夜が明けるまで思いつつ眠れないと理解できる。

第 485 番歌の反歌として第 486 番歌がある。

486 番歌：山羽爾 味村 去奈礼騰 吾者左夫思恵 君ニ四不在者

(やまのはに あぢむらさわき ゆくなれど われはさぶしゑ きみにしあらねば)

歌意は大体、あじの群鳥の騒ぎていく如く、国内道路を満さわぎて人は多く行くけど、一人だに我が恋しく思う君にあらねば、なぐさむ意もなく、一筋にさぶさぶしく、さてもかなしく思う事哉なりの意味である。

3248 番歌：式嶋之 山跡之土丹 人多 満而雖有 藤浪乃 思纏 若草乃 思就西君目ニ恋八将明 長此夜乎

(しきしまの やまとのくにに ひとさにはに みちてあれども ふちなみの おもひもとほり わかくさの おもひつきにし きみがめに こひやあかさむ ながきこのよを)

歌意は大体、人が多く満ちているが他の人には目もとどまらず、心より思うのは君一人の容儀であるという¹¹。

3249 番歌：式嶋乃 山跡乃土丹 人二 有年念者 難可将嗟

(しきしまの やまとのくにに ひとふたり ありとしおもはば なにかなげかむ)

大意は式嶋の国に我が思う人が二人あると思ったならば、どうしてこんなに嘆きませんぞという理解できる。

要するにこの歌は世の中の「人多い」と私の中では「一人だけ」の存在の対比を通して一筋の恋を表すものだと見てよかろう。また、各注釈書もこの点について特に異議がないようである。

以上のように、関連歌を見てみると、いずれも「多い」と「一つ」の量的な対比を通して「君」を思う強い気持ちを表現している歌である。しかし、同じ趣旨でも歌の作者も異なるし、歌の背景も異なることからそれぞれの歌はそれぞれの表現を通してその趣旨を歌ってい

るのである。

3. 各句表現についての考察

第一句「うちひさす」は枕詞であると、各注釈書¹²により確認できる。ここでは主な対象として考証しないことにする。

そして、第二句の宮は「平城京」「藤原京」かの問題もある。完訳¹³は「平城京」としている。柿本人麻呂の生年推測——653年～709年（55歳～57歳）『日本古典文学大辞典』¹⁴、また柿本人麻呂歌集の二百首近い略体歌には天武九年（680年）以前に人麻呂によって筆録された歌が多いことから見れば、「藤原京」だと思われる。当時の「宮道」の状況に関しては、『飛鳥藤原の都』¹⁵（岩波書店）という本が参考になる。

第2382番歌について、今までの研究で問題とされているのは第二句である。第二句「宮道人」は第三句と関わるものであり、『校本万葉集』¹⁶により、その訓読みが問題されるとわかる。それぞれ、「宮道人」を「みやちをひとは」（古葉略類聚鈔）、「みやちのひとは」（寛永版、諸本）、「みやちにひとは」（嘉暦伝承本）と読まれる説がある。各注釈書¹⁷は殆ど「みやちをひとは」と従うが、『契沖全集』¹⁸は「みやちのひとは」としている。「を」、「の」、「に」の読み方によって歌全体の意味に関わるものであり、詳しく考えてみたい。第二句と第三句は緊密な関連があるので、まず第三句の訓読みを確かめたい。

第三句「雖満行」は「みちゆけと」（寛永版）、「おほかれと」（西本願寺本、京都帝国大学本）と訓読される（『校本万葉集』¹⁹）。この二つに読み方に関して、「満」という漢字に対する読みを調べたところ、「おほ」というほかの例は『万葉集』では一つも見当たらなかった。

要するに「おほ」という読みは無理があると思う。むしろ、「満」を「みち」と訓んだほうが妥当であろう。そして、「満行」（みちゆけと）という「満」と「行」の組み合わせ方も『万葉集』では唯一の例となっていて、柿本人麻呂の独特な表現と思われる。

その独特な表現はどこから思いついたのであろう。中国の漢文例と併せて考えるべく、漢文の用例と比較してみたいと思う。『全唐詩』²⁰では「満」と「行」が綴っている例は9例しかない。

第一例

「吊白居易」（李忱）

綴玉聯珠六十年，誰教冥路作詩仙。浮雲不系名居易，造化無為字樂天。

童子解吟長恨曲，胡兒能唱琵琶篇。文章已滿行人耳，一度思卿一愴然。

ここの「文章已滿行人耳」は「文章はすでに通行人の耳にいっぱい入っている」と理解で

きる。「文章」は名詞である。「満」は動詞である。「行人耳」は「道を歩く人たちの耳」の意味でやはり名詞である。要するに、「名詞～動詞～名詞」のパターンである。

第二例

「流夜郎永華寺、寄尋陽群宮」（李白）

朝別凌煙樓，賢豪満行舟。

暝投永華寺，賓散予独醉。

愿結九江流，添成万行涙。

写意寄庐岳，何当来此地。

天命有所悬，安得苦愁思。

ここの「賢豪満行舟」は「紳士たちで船がいっぱいである」と理解できる。「賢豪」は名詞で、「満」は動詞で、「行舟」は名詞である。第一例と同じパターンである。

第三例

「自代内贈」（李白）

宝刀截流水，無有断絶時。妾意逐君行，缠绵亦如之。

別来門前草，秋巷春转碧。掃尽更還生，萋萋満行跡。

（続きを省略）

ここの該当箇所は「萋萋満行迹」の一句に当たる。「萋萋」は草が生い茂ている様子指すので、ここで「生い茂る草」と理解するべきである。要するに名詞である。「満」は「あふれる」の意味で動詞である。「行跡」は「行ったり来たりする人たちの足跡」の意味でやはり名詞とするべきである。

第四例

「送李秀才入京」（顧況）

五湖秋葉満行船，八月靈槎欲上天。

君向长安余适越，独登秦望望秦川。

該当箇所の「秋葉」は秋の落ち葉の意味で名詞である。秋の葉っぱが舟にいっぱい落ちている様子を描いている。「満」はやはり動詞として使われる、「あふれる」の意味である。「行舟」は「行く船」の意味で名詞である。上の三例と同じパターンである。

第五例

「立德新居」（孟郊）

(前略)

崎岖有懸歩，委曲饒荒尋。
遠樹足良木，疏巢無争禽。
素魄銜夕岸，綠水生曉潯。
空眈伊洛視，仿佛瀟湘心。
何必尚遠異，忧勞滿行襟。

(続きを省略)

この一首の該当箇所は「忧勞滿行襟」の一句である。「心配や苦勞の涙や汗等によく働いて動く衣服にあふれている」と理解である。ここの「行」は服の意味の「襟」の形容詞として使われている。従って、名詞～動詞～名詞のパターンである。

第六例

「送裴璋還蜀因亦懷歸」 (雍陶)

客在劍門外，新年音信稀。自為千里別，已送几人歸。
陌上月初落，馬前花正飛。離言殊未盡，春雨滿行衣。

「春雨滿行衣」は「春の雨は道を歩く人の服を濡らした」意味であり、「春の雨」は服にいっぱい落ちたと理解するべきである。やはり、名詞～動詞～名詞のパターンであろう。

第七例

「偶題二首」(杜牧)

勞勞千里身，襟袂滿行塵。深夜懸雙淚，短亭思遠人。
蒼江程未息，黑水夢何頻。明月輕桡去，唯慶釣赤鱗。
有恨秋來拔，無端別後知。夜闌終耿耿，明髮竟遲遲。
信已凭鴻去，歸唯與燕期。只因明月見，千里兩相思。

ここでは「襟袂滿行塵」の一句について、「襟袂」は名詞として理解しやすいであろう。「行」はやはり「ほこり」の意味の「塵」の形容詞と読み取れるので、「服には旅のほこりでいっぱい」の意味である。要するに「満」は動詞である。

第八例

「贈陳望堯」(李咸用)

若說精通事業長，詞人爭及孝廉郎。秋螢短焰難盈案，隣燭余光不滿行。
鵠箭親疏雖異的，桂花高下一般香。明時公道還堪信，莫遣錐鋒久在囊。

該当箇所「隣燭余光不滿行」の一句ですが、「隣の蠟燭の光は道を照らすのに十分ではない」と理解できる。ここの「不」は「満」の否定であり、典型的な動詞の用例である。

第九例

「秋晚途次」 （任翻）

秋色満行路，此時心不閑。孤貧遊上国，少壯有衰顔。

衆鳥已帰樹，旅人犹過山。蕭条遠林外，風急水潺潺。

最後の一例、「秋色」は「行く道路」にあふれていると理解しやすいであろう。以上の 9 例は例外なく、すべて名詞～動詞～名詞のパターンである。この語順は中国語文法の語順にもふさわしい。以上は漢籍の例だが、次は万葉集での用例と比較してみよう。

万葉集では「満行」の例はほかにないが、「満来」の例（1 2 1 番歌、6 1 7 番歌、9 1 9 番歌、3 1 5 9 番歌、3 2 4 3 番歌、4 2 1 1 番歌）はよく見られる。しかし、「満」は殆ど「海の塩が満ちてくる」という意で、「～てくる」という複合動詞になる。要するに「来」は「満」を修飾するものだ。だが、「満行」の場合は「人が満ちていく」というふうに理解しがたい。したがって、逆に「満」は「行」を修飾するものと理解されるだろう。「満」は「みちる、みたす、みちること」で、「数が萬に至る」の意味を持っている。『左氏、閔、元、萬盈数也、服注』「数従一至萬為満。」という。この歌は「宮道人」の数の多さを強調して、第五句の「正一人」と対照するもので、「満」はその「数の多さ」を形容する役割で使われたのだと思われる。

ではここで第二句全体の問題に戻る。第二句「みやぢ（ ）ひとは」の（ ）は「を」、「の」、「に」の問題については『万葉秀全注』（稲岡）は「を」のほうが多数の人々の動きを印象する効果があると言っている。

まず、「を」は『万葉集』4 6 2 番歌「長き夜をねむ」、1 8 8 1 番歌「春日野を行きかへり」のように、動作の成立するときや場所を表すのだ。（『時代別国語大辞典』²¹（上代））。「に」は8 7 2 番歌「山の上に領巾を振りけむ」のように動作の起こる、あるいは状態の成立する場所、時間を表す（A）。また、4 3 6 番歌「手に巻き持ちて」のように動作の帰着する対象を表す役割（B）もある。第三句では「満」が「行」を修飾することとしたら、「行」が主な動詞であって、第二句は「に」とすれば、動作のある状態、あるいは静止な動作状態が行われる場所を表すのになる。「を」のほうが「行」という動作の動きや人々の流れを表すことができる。また、「満」という漢字は「盈溢」（『説文解字』という動きのある意味があって、第二句も「を」としたほうが前後呼応になるのであろう。要するに満ち溢れるように歩くという情景を生き生きと描いているのだ。

第四句「吾念公」、第五句「正一人」はこの歌の中心である。「ワカヲモフキミハタタヒトリノミ」(寛永版、細井本²²)、「ワレカヲモフハキミタタヒトリ」(温故堂本、細井本、京都帝国大学本、嘉暦伝承本)、「ワレカオモフハキミタタヒトリ」(西本願寺本)。主に「吾」を「わか」と読むのか、「われか」と読むのかの問題と、「は」を「おもふ」の後につくのか、それとも「きみ」の後につくのかの問題である。各注釈書²³は調べたところ全部「あがおもうきみはただひとりのみ」としている。まず、「われかおもうは」と「わがおもうきみは」、「きみただひとり」という表現は万葉集では一つも例がない。それに対して、「あがおもう」の例は2793、2736、3277番歌など例が多く見られるため、各注釈書の従っている読みは妥当だと思う。

第五句「正一人」の漢字表現の問題として「ただ」の漢字について「唯」「直」「但」ではなく、「正」が選択された理由を論じてみたい。むしろ、これはこの歌を理解するには最大の課題だと考える。

『万葉集』では「ただ」の漢字として「正」を使ったのはこの二三八二番歌だけである。そのほかに「直」が一番多くみられて、「但」と「唯」もある。「ただ～のみ」と読まれるのは2078番歌「直一夜耳」、2311番歌「直一目耳」、2751番歌「但一耳」、3075番歌「直一目耳」がある。また、「ただひとり」と読まれるのは3889番歌「但独」がある。1885番歌「唯人者舊之 応宜」以外は「ただ」が意味的には全部限定を表すものである。「ただ～のみ」のほうが「ただ～」より更に限定を強調するのは理解しやすい。だが、「吾念公 正一人」は限定の意味だけではない。ほかの歌と異なるある気持を表すために「正」が選択されたのである。人麻呂が「正」という漢字を通してどんな意味を表そうとしたのだろうか。

まず、「正」について『説文解字』²⁴では「正、是也。古文正从一足足者亦止也。」と解釈している。要するに、是という事と、一をもって止める、または足りるという意である。また「直」について、『廣雅』は「直、貞、正也。」としている。『説文』では「直」は「正見」の意味であるという。次は「貞」について『易・乾』²⁵では「文言曰、貞固足以幹事。」何注曰：「貞、信也。」そして、『張衡・思玄賦』²⁶「慕古人之貞節。注：衡曰、貞、誠也」という。最後に「誠」については『説文解字』では「信也」という。要するに「貞」は「誠」と「信」の意味と関わっているのが分かる。では、「正」は「直」と「貞」という関係を持つのだろうか。順番に見ていこう。

直、『説文解字』²⁷「正見也」という。「偏らない、曲がらない」という点では「正」と相通している部分があるが、「誠」の意味はない。『玉篇』²⁸では「直、不屈也。」とある。万葉集では2311、3075番歌のように「一目ぼれ」の意味で使われる場合が多い。まさに「正見」という意味に当たるのだ。

正、「止」「足」の意味があって、要するにそれだけで十分、それでいいという意味が取れ

る。そう言ったところで、「直」と異なる。また、正は「貞」の意味を含めているのではないかと考える。即ち、「誠」と「信」の意味を持っている。『論語・述而』²⁹「正弟子不能学也」はその例であると考ええる。

また、「唯」に関しては、『廣雅・釈詁』³⁰は「唯、独也」という。限定の助詞として「一人」の意味を表す場合が多い。『易、同人』「唯君子為能通天下之志」。「唯」も「誠」の意味を持たない。

「但」の場合、『史記・劉敬伝』³¹「匈奴匿其壯士肥牛馬、但見老弱羸畜。」

『史記・扁鵲伝』³²「但服湯二旬而復故。」の例のように「それのみ」の意味である。要するに限定だけではなく、量の少なさなど、話し手の想像或いは希望より少ない、弱い場合を強調するものだ。当然、これも「誠」と関係ないのだ。

『全唐詩』³³では「正一～」の例は3例ある。

第一例

「次北固山下」 （王湾）

客路青山外，行舟緑水前。潮平两岸闊，風正一帆懸。
海日生殘夜，江春入旧年。郷書何處達，歸雁洛陽辺。

第二例

「到郡未決日登西樓見樂天題詩因即事以寄」 （劉禹錫）

湖上收宿雨，城中无昼塵。樓依新柳貴，池帶乱苔青。
云水正一望，簿書来繞身。烟波洞庭路，愧彼扁舟人。

第三例

「題桃樹」 （杜甫）

小徑昇堂旧不斜，五株桃樹亦从遮。高秋総喂貧人実，
来歳還舒満眼花。帘戸每宜通乳燕，兒童莫信打慈鴉。
寡妻群盜非今日，天下車書正一家。

そして、具体的に『万葉集』の歌を見してみる。右に述べた通り、「ただ～のみ」は四つの歌に出現された。

2078番 玉葛 不絶物可良 佐宿者 年之度爾 二遍往来 君爾 直一夜耳(たまか
づら たえぬものから さぬらくは としのわたりに ただひとよのみ)

2311番 皮為酢寸 穂庭開不出 恋乎吾為 玉蜻 直一目耳 視之人故爾(はだすす

き ほにはさきでぬ こひをあがする たまかぎる ただひとめのみ みしひとゆゑに)

2751番 味乃住 渚沙乃入江之 荒磯松 我乎待児等波 間無想念者(あちのすむ
すさのいりえの ありそまつ あをまつこらは ただひとりのみ)

3075番 如此為而曾 人之死云 藤波乃 直一目耳 見之人故爾(かくしてそ ひと
のしぬといふ ふちなみの ただひとめのみ みしひとゆゑに)

そして、「但独」の例、

3889番 人魂乃 佐青有公之 但独 相有之雨夜乃 葉非左思所念(ひとだまの さ
をなるきみが ただひとり あへりしあまよの _____しおもほゆ)

以上の歌の共通点を取り上げて言うと、まさにその想像、希望より少ない場合の「たったひとつ」の存在の強調である。だが、第2382番歌は「正」という「誠」「信」の意味を含んだ漢字を通して、女性が恋人に対する気持を適切に表すことができたのだ。その気持は唯一で、しかも、決して想像、希望より少ない存在ではない。それは一人だけで十分、一人だけがその女性の全部、もうほかの誰と出会いたい気もしない感情ではないか。それがこの歌の特徴として「正」が選択された理由だと考える。

4. 「満行」と「正一人」から見る柿本人麻呂の独自性

以上の2382番歌の考察を通してこの歌の独自性としての「満」と「正」の例を見てみよう。漢字採用の独自性として二つのポイントが挙げられる。第三句の「満」と第五句の「正」である。

漢字は「音」、「形」、「意」という三つの要素があるとされるが、「音」とは発音のこと、「形」とは漢字の書き方や形の外見を指す、最後に「意」というのは漢字が代表する意味、中身のことである。日本語も中国語も漢字を使っている。要するに形は同じである。しかし言語自体が異なることから当然同じ漢字でも発音が異なる。では、中身の意味のほうはどうだろう。

まず、「満」について、漢籍では動詞として使われるが、第2382番歌では動詞の「行」の前に置いて「行く、歩く」という動作の様子を表現する役割をする。要するにこのような使い方は日本語の文法の語順と一致するが、同時代の日本の作歌にはほかに例がほとんどなく、漢籍の用法とは異なるのである。「満行」のような表現は柿本人麻呂の創作ではないかと考えられる。

次に挙げられるのは「正」である。「正」その漢字自体はよく見られる漢字ではあるが、「ただ」の漢字としてはあまり使われない。また「正一人」のような表現も万葉集ではほか

に用例は見られない。一方で漢籍では「正」「一」「～」のような表現はよく見られ普通の用法である。柿本人麻呂は漢籍の理解をもってこの一句を書き下ろしたのではないかと推測できる。これも彼の創作と考えられる。

いずれにしても、第 2382 番歌は極普通の一首とされてきたが、意外にも二つもの「創作」が隠されている。2382 番歌は秘かに作者である柿本人麻呂の独自性を我々後世の人々に見せている。

柿本人麻呂の創作であるが、二か所の創作は同じパターンの創作ではないことに注目したい。「満行」のほうは漢字の字そのものの形を使って、日本語の語順に合わせた使い方である。一方で「正一人」のほうは日本語の発音に合わせて日本語では全然使わないような漢字選択をして漢語と同じように表現する使い方である。

ここで、和製漢語の形成にも関連する問題になるが、日本漢語はイコール字音語であり、そのうち三つのジャンル分けとされている³⁴、それぞれ純漢語(中国由来の語)、変容漢語(意味的、形態的に変化した語)、和製漢語(日本で作られた語)である。もしこの三つのジャンルに当て嵌めさせるのならば、「満行」は和製漢語、「正一人」は純漢語と言えるだろう。「満行」と「正一人」のいずれにしてもこれらは柿本人麻呂の漢字理解と表現意図によって 2382 番歌のために選び抜かれた漢字たちである。2382 番歌は柿本人麻呂のほかの代表作と同じように彼の表現の独自性が窺われる一首であり、彼の思想と感性を理解するのに重要なヒントを与えてくれる一首である。

5. 結論

本稿は柿本人麻呂の作歌、万葉集巻 11 に収録される第 2382 番歌について考察を試みた。各句の考察比較に基づいて、ほかの関連作歌及び万葉集全体では特徴的な漢字組み合わせ例「満行」と漢字「正」の独自性を示した。

「満」と「行」の異例的な組み合わせについて、その表現手法はある程度、漢籍の影響を受けたと考えられるが、日本式の言語習慣と結合した結果、独特のものとなったのである。

また「正」は「ただひとりのみ」の「ただ」の漢字に選択されたのは明らかに漢籍の影響を受けたと思われる。「正」という漢字の背後には「正」という符号が代表する文化や思想が存在しているのであろう。

柿本人麻呂をはじめとする万葉歌人らの作品からは、漢字というツールを経由した日中双方の交流が見られるのである。古代の日本歌人らは中国と共通する漢字というツールに各自の思想と文化に基づいた理解を付与したり、また漢字というツールを通して伝わってきた中国文化を受容したりしていたのであろう。

本稿で提示した万葉集における柿本人麻呂の漢字用例のような独自性は現代の日本社会および中国社会になっても漢字使用に尚深い影響を残している。漢字はすで日中両国の共通の言語記号となっている。そしてこの共通記号は過去と現在、そして未来へと日中それぞれ

の言語を使う人々の心と歴史を繋ぎ、ますます活躍し変容していくものであろう。

-
- 1 稲岡耕二『万葉事典』(学燈社 1994 年)
 - 2 『万葉事典』同注 1
 - 3 契沖『万葉代匠記』、小島憲之『上代文学と中国文学』(塙書房)、中西進『万葉集の比較文学的研究』(桜楓社)、芳賀紀雄「万葉集比較文学事典」『万葉集事典』(学燈社 1994 年)
 - 4 日本古典文学大辞典編集委員会 『日本古典文学大辞典』(岩波書店 1983 年)
 - 5 同注 4
 - 6 同注 4
 - 7 稲岡耕二 『人麻呂の表現世界』(岩波書店 平成 3 年)、神野志隆光『柿本人麻呂研究』(塙書房 平成 4 年)、品田悦一「人麻呂作品における主体の獲得」『国語と国文学』平成 3 年)
 - 8 小島憲之、木下正俊、東野治之 『新編日本古典文学全集 万葉集』(小学館 1995)
 - 9 斎藤茂吉 『万葉秀歌』(岩波書店 1968)
 - 10 鹿持雅澄 『万葉集古義』(高知県文教協会 1982)
 - 11
 - 12 青木生子『新潮日本古典集成万葉集』(新潮社 1978)、土屋文明『万葉集私注』(筑摩書房 1949)、高木市之助『古典文学大系万葉集』(岩波書店 1957)、稲岡耕二『万葉集全注』(有斐閣 1998)
 - 13 小島憲之、木下正俊、佐竹昭広『完訳日本の古典 万葉集』(小学館 1982)
 - 14 日本古典文学大辞典編集委員会 『日本古典文学大辞典』(岩波書店 1983)
 - 15 坪井清足『飛鳥藤原の都』(岩波書店 1985)
 - 16 佐々木信綱等編『校本万葉集』(校本万葉集刊行会 1925)
 - 17 斎藤茂吉 『万葉秀歌』(岩波書店 1968)、窪田空穂『万葉集評釈』(東京堂 1948)、沢瀉久孝『万葉秀注釈』(中央公論社 1970)、稲岡耕二『万葉秀全注』(有斐閣 1998)、土屋文明『万葉集私注』(筑摩書房 1949)、高木市之助『古典文学大系万葉集』(岩波書店 1957)、小島憲之『新編日本古典文学全集』(小学館 1994)、青木生子『新潮日本古典集成万葉集』(新潮社 1978)、小島憲之、木下正俊、佐竹昭広『完訳日本の古典 万葉集』(小学館 1982) 武田祐吉『万葉集全注釈』(角川書店 1957)
 - 18 契沖『万葉代匠記卷二』(朝日新聞社)
 - 19 『校本万葉集』同注 16
 - 20 『全唐詩』(中華書局 1985)
 - 21 『時代別国語大辞典』上代語辞書編修委員会編 (三省堂 1967)
 - 22 『校本万葉集』同注 16
 - 23 同注 17
 - 24 [漢]許慎『説文解字』江蘇古籍出版社(2001)
 - 25 宇野精一、平岡武夫『全釈漢文大系 易経』 集英社(1974)
 - 26 [梁]蕭統編 [唐]李善注『文選』上海古籍出版社(1986)
 - 27 同注 24
 - 28 顧野王編選『原本玉篇残卷』 中華書局(1985)
 - 29 孔子『論語』 中華書局(2006)
 - 30 [魏]張揖選、[隋]曹憲音『広雅』 台湾商務印書館(1966)
 - 31 司馬遷『史記』 中華書局(1982)
 - 32 同注 31
 - 33 彭定求選『全唐詩』 中華書局 (1979)
 - 34 陳力衛 『和製漢語の形成とその展開』 日本大学博士(文学)論文 乙第 6270 号